



TITLE:

フランス18世紀のプロテスタント

AUTHOR(S):

木崎, 喜代治

CITATION:

木崎, 喜代治. フランス18世紀のプロテスタント. 経済論叢 1992, 150(2-3): 1-24

ISSUE DATE:

1992-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/44846>

RIGHT:

經濟論叢

第150巻 第2・3号

哀 辞

故岡部利良名誉教授遺影および略歴

フランス18世紀のプロテスタント……………	木 崎 喜代治	1
1950年代住友金属工業の銑鋼一貫企業化過程…	張 紹 喆	25
フォードにおける経営再建の過程と合理化……	平 野 健	39
ローカル・ミニマム論の検討（1）……………	李 昌 均	58
アメリカにおけるマーケティングの生成（1）…	栗 村 俊 夫	82

研究ノート

社会主義と商品経済……………	八 木 紀一郎	101
----------------	---------	-----

追 憶 文

人情の人岡部利良先生……………	河 合 信 雄	109
岡部先生を偲びて……………	中 居 文 治	111

学 会 記 事

平成4年8・9月

京 都 大 学 經 済 學 會

フランス18世紀のプロテスタント

木 崎 喜 代 治

は じ め に

われわれは、これまで、フランスにおけるプロテスタントの歴史の概略を素描し、17世紀末の「ナント勅令廃止勅令」にまで到達した¹⁾。われわれの最終目的は、18世紀末に発布されたいわゆる「寛容令」の意義と、その実現に大きい役割を果たしたマルゼルブの行為の意味の解明にあるのだが、この問題を取りあげるためには、そのまえになお、18世紀におけるフランスのプロテスタントの存在様態とプロテスタンティズムの再建運動の概要を素描しておく必要があるように思われる。その実態は、ふつう想像されるよりもはるかに複雑であり、あるいは、複雑怪奇と呼んでもよいほどであるからである。そのさい、記しておくべき事実や論点は当然のことにきわめて多岐にわたり、さらに、日本語で書かれた文献がまったく存在しないゆえにいっそうそれらの論点への詳細な言及の必要性が感じられるが、ここでは、それにかかわる論述は最小限度にとどめることにする。したがって、以下に記すことは、一つの準備作業であり、論述というよりも列挙と呼んだほうが適切であるかもしれない。

これまで述べてきたように、フランスのプロテスタンティズムは、ルイ14世の執拗な政策によって、壊滅的な打撃を受けた。全牧師の追放、全教会の破壊、および一切の礼拝の禁止によって、プロテスタント信仰は生きのびる場所を失った。ただ、この信仰は、個々人の魂の奥底においてのみ、一切の外的表現を奪われて、存在することができただけであった。プロテスタンティズムをこの

1) 『経済論叢』の139-6 (1987.6) 号から、144-5/6 (1989.11/12) 号まで、6回にわたって、断続的に発表されたもの。本稿も、前稿と同じく、一次資料にほとんど言及していない教科書的概観である。

状態に追いつめておけば、時ならずして、それは死滅してしまうであろうというのが、この政策の推進者たちの予想であった。

しかし、この予想が誤っていたことがただちに明らかとなった。政府の残忍な弾圧のもとにおいて、捕えられた牧師たちは処刑台へ引きたてられ、男の信者たちはガレー船に送られ、女たちは監獄に閉じこめられたが、プロテスタント信仰が消滅する気配はまったく見えなかった。すでに述べたように、プロテスタントたちは、たとえ改宗宣言を余儀なくされたとしても、なお消極的抵抗を、そして、もし可能な機会が少しでも存在するならば、積極的抵抗を試みることをやめはしなかった。

王国政府や全国聖職者会議が下に向かっていかに厳しい命令を発したとしても、プロテスタントたちのいわばゲリラ的抵抗にたいしてはほとんど効果を発揮することはできなかった。カトリックに改宗したとされ、「NC=新カトリック」と呼ばれている人々に直接に接している各教区の司祭たちは、だれよりもよくそれを感知し、上方からの非実際的な指令を腹立たしい気持ちで受けとっていた。したがって、司祭たちの多くは、与えられる命令を遵守して、「新カトリック」を相手に際限のない紛争を繰り返すよりも、むしろ、かれらと可能なかぎり妥協して、平和的な共存をはかりたい気持ちになっていたのである。もちろん、「ナント勅令廃止勅令」の精神を忠実に守ろうとする上級聖職者の圧力がつねに存在しており、下級聖職者のなかにも、「新カトリック」との妥協を断固として拒むものがある以上、平和的共存を望むカトリック司祭たちの行動にも広い自由があるわけではなかった。

以上のような諸点については、すでに前稿のなかで述べたとおりである。

こうした事情のもとで、プロテスタントの信仰の再生はいかにして始まったのであろうか。

荒野の教会

まず、都市においては、政府やカトリック教会の監視が厳しく、プロテスタ

ントたちがその信仰を外的に表現することは容易ではなかった。したがって、秘密の集会が行われたとしても、家庭のなかで、数人のものが、奥まった部屋でひそかに祈りを捧げるだけであった。これに反して、農村地帯においては、上からの監視がすみずみまで届かないゆえに、「ナント勅令廃止勅令」の公布の直後からすでに、小規模であるとはいえ、一家庭以上の信者による秘密の集会が開かれ、礼拝が行われていた。農家の納屋や地下室、廃坑や洞窟、あるいは森のなかや谷間が選ばれていた。身を潜めている牧師が居あわせたときには、この牧師がその集会を主催することはもちろんのことであるが、牧師にたいする厳しい追及のもとでは、そのような場合はむしろ例外であった。したがって、集まった信者のうちのもっとも学識のあるものが牧師の役割を果たすことになった。プロテスタンティズムにおいては、万人牧師の思想があり、したがって、非常事態においてはこうした手段が許されていたのである。このような俗人の指導者のなかには、説教者として優れた能力を発揮するものがあり、やがて、かれらは真の牧師となり、プロテスタンティズムの再建において重要な役割を果たすことになる。これらの集会は「荒野の (du désert) 教会」と呼ばれていた²⁾。

もちろん、この「荒野の教会」は、参加者の生命の危険をおかして行われていたのであり、この集会が急襲された場合には、犠牲者がでることは不可避であった。1688年2月22日に、ポワトゥーにおいて摘発されたある荒野の集会においては、16歳の少年が約1,500人の信者のまゝで聖書を読んでいたが、急襲した軍隊の発砲によって多数の死傷者がでたうえ、40人が逮捕されたといわれる。この事件においてわれわれの注意を引くのは、「ナント勅令廃止勅令」からわずか2年あまりのちにすでに1,500人もの大集会が開かれていたことであり、また、集会を主催していたのが、わずか16才の少年であったこと（かれには、聖書を読むこと以上のことはできなかったのではあるまいか）、さらに、

2) 荒野の教会の歴史については、コクレルの大著がある。Charles COQUEREL, *Histoire des Eglises du désert chez les protestants de France depuis la fin du règne de Louis XIV jusqu'à la Révolution française*, 2 vol., Paris 1841.

逮捕された人間がわずか40人であったことである。万一の場合に備えての逃亡の手段もあらかじめ用意されていたのであろう。集会の参加者の中には女性も子供も含まれており、女の数のほうが多いのが普通であったとも言われている。それだけに、軍隊の急襲に遭遇した場合、犠牲者の数も多いことになるだろう。

すでに、前稿において掲げた別表で示されていたように³⁾、「ナント勅令廃止勅令」以降大革命にいたる約100年のあいだに、摘発された集会は341件に達し、処刑された男子は219人、女性は32人にのぼる。投獄されたものは、男女ほぼ同数であり、それぞれ約3,500人である。殺害されたものは635人と算出されているが、この中には後述のカミザール戦争における戦死者は含まれていない。

プロテスタントたちにたいするこのような迫害は、当然のことに、かれらの精神のうちに出口のない焦燥感をうみだし、それはしばしば特異な形をとって——宗教においては「奇跡」の形をとって——表出される⁴⁾。1688年、ドーフィネ地方の16才の文盲の羊飼いの少女イザボー・ヴェンサンが睡眠中に予言を語り始めたのである。この噂を伝え聞いた周辺の村々の人々が、少女を通じて語られる神の声を聞こうとして集まり始めると、当局はイザボーを捕らえて、僧院へ幽閉する。しかし、これを契機として、各地に種々の「予言者」が続出し始め、その周囲には、わずかな希望を求めるプロテスタントの信者が集まってくる。軍隊が出動して、これらの「狂信者」を排除しようとして、流血の事件が起こる。

また、ある地方では、夜になると、天上から聖なる甘美な音楽が鳴りひびき、多くの人がそれを聞くために集まってくる。当然、ここにも軍隊が介入するこ

3) 木崎喜代治「『ナント勅令廃止勅令』とその直接的帰結」『経済論叢』, 144-5/6 (1989.11/12), 35ページ。

4) これらについては、つぎのものを見られたい。Ch. BOST, Les <Prophètes> du Languedoc en 1701 et 1702, *Revue historique*, 1921. ditto, Les <Prophètes> des Cévennes au XVIII^e siècle, *Revue d'histoire et de philosophie religieuses*, 1925. Louis MAZOYER, Problèmes religieux et réalités sociales. Les origines du prophétisme cévenol (1700-1702), *Revue historique*, 1949.

となる。

こうした超自然的現象は、一時的に下火となるが、1700年の夏ごろにはふたび活発となる。各地に、多くの「予言者」たちが現われ、活発に活動し、多くの信者を集める。予言者たちは、一般に、プロテスタントたちにむかって、この苦難の時代を耐え抜いて生きること、そして、現在の生を悔い改めることを求めている。

クロード・ブルーソン

われわれはすでに、「ナント勅令廃止勅令」の公布直前におけるクロード・ブルーソンの抵抗運動に少しばかり言及したが⁵⁾、ここで、それ以降のかれの活動に触れておくのが適当であろう。というのも、彼が採用した抵抗の形式が、結局のところ、フランスのプロテスタンティズムの再建におけるもっとも適切な方法であったように見えるからであり、事実、かれは、牧師ではなかったにもかかわらず、「ナント勅令廃止勅令」直後において、プロテスタンティズムの復活に最大の貢献をなしたからである。

外国へ逃れたプロテスタントの牧師はフランスに帰って、迷える民衆を導くために生命を危険にさらすべきであるか、あるいは、サタンの支配する地を離れたところに留まるべきかという問題についての論争が1686年ころからすでに始まっていたが、スイスに逃れていたブルーソンは、1688年に『フランスの牧師への手紙』をかいて、外国へ去った牧師は帰国すべきであると呼びかけるとともに、翌年には、牧師のフランソワ・ヴィヴェンにつぎ従って、プロテスタンティズムの再建に身を投じた。

当時、フランスのプロテスタンティズムの現状に対するプロテスタントたちの態度は、予想されるように、二つに大別され、一方の穏健派は状況を受動的に把握し、ルイ14世の政策の転期に期待をかけていたが、他方の過激派は、む

5) 木崎喜代治「『ナント勅令』廃止へむけての弾圧政策」『経済論叢』144-1 (1989. 7), 12ページ。

しる対外戦争によってフランスが敗北することを期待しており、したがって、イギリスを始めとする非カトリック国家の介入を積極的にひきおこそうとしていた。ヴィヴァンはこの後者に属しており、フランス南部での民衆蜂起を計画していたが、ブルーソンはその計画には消極的であった。

このような見解の相違があったにせよ、かれら2人は、他の5人の説教師と1人の牧師とともに、スイスを出発し、2人ずつの4つのグループに別れてフランスに潜入した。しかし、1689年9月の蜂起は失敗し、これに参加した約100人の信者のうち、数人は逮捕され、死刑台あるいはガレー船へと送られた。ヴィヴァンは山間部へ、ブルーソンは平野部へと逃れ、秘密の礼拝を続けた。8人の指導者のうち3人の説教師は翌年に捕えられて処刑された。ヴィヴァンとブルーソンの対立は、1690年、スパイ活動をしていた1人の偽牧師と1人の棄教者が、かれらの手中に落ちたときにまたしても明かとなった。ヴィヴァンはかれら2人の死刑を主張し、ブルーソンはそれに反対したのである。

2年のちの1692年、ついにヴィヴァンは狙撃されて死亡し、同志の他の4人も捕らえられて処刑された。いまや独りとなったブルーソンは、一切の暴力を排除するという原則にたって牧師の地下活動を続けた。かれは、政府の厳しい追及を奇跡的に逃れ続けたが、その首には莫大な懸賞金がかかっていた。いよいよ最後の危険が迫ったことを知ったブルーソンは、1693にふたたびスイスへ逃れ、やがて、今度は、かれの顔を知る人の少ない北フランスへ潜入した。ここで、秘密の礼拝活動を精力的に続ける一方、他方では、プロテスタントの再組織化にかんする多くの文書を書き、プロテスタント信仰の教義を明らかにした。1696年にはまたしてもスイスへ逃れることを余儀なくされ、そこからオランダへ赴いた。かれはここで、志を同じくする人々と8人委員会を結成するが、かれが求めている救済はけっして外国には——その国王をも含めて——見いだしえないこと知ったブルーソンは、1697年、またしてもフランスに潜入して、民衆に接し始めた。ルイ14世のたび重なる戦争によってフランスの民衆は疲弊しており、さらに南部のプロテスタントたちは、ラングドックの地方監察官バ

ヴィルの弾圧のもとに呻吟していた⁶⁾。

しかし、ついに、ブルーソンは、1698年に捕らえられ、バヴィルによって車刑を宣告され、11月4日に処刑された。「ナント勅令廃止勅令」の発布の直前および直後の時期に、フランスの国内において、プロテスタントのためにもっとも重要な指導的役割を果たしたのは、このクロード・ブルーソンであった。

1697年9月20日、リスヴィックの講和条約が結ばれ、フランスと他のヨーロッパ諸国との間の数年にわたるアウグスブルグ戦争は終結した。この講和条約によって、イギリスのウィリアムとメアリの共同統治はフランスによっても承認され確固たるものとなった。

しかし、フランスのプロテスタントの失望は大きかった。かれらは、ウィリアム3世が、フランスのプロテスタントのために、ルイ14世にたいして何らかの働きかけをなすであろうという強い期待を抱いていたのである。じっさい、オランダからイギリスに向かったウィリアム3世の軍隊15,200人のなかには、736人のフランスのプロテスタントの士官たちが含まれていた。しかし、リスヴィックの講和条約のなかには、フランスのプロテスタントにとって有利な条項はなにひとつとして含まれてはいなかった。ウィリアムは、もし条約のなかに、フランスのプロテスタントを優遇すべしという条項を挿入させるなら、フランスは、それに対抗して、イギリスのカトリックを同様に扱うべしという条項の挿入を要求するであろうことを恐れたのである。ここでも、すでに当然のことながら、政治的配慮が宗教問題を押しつけている。リスヴィックの講和条約にかけるフランスのプロテスタントの期待が大きかっただけに、かれらの絶望もまた深いものであった。そのうえ、南部におけるバヴィルの弾圧は伝說的となるほどに徹底的であった。

こうした状況のなかで、ついに、カミザールの戦争が始まり、3か年にわたって国王軍を苦しめることになる。

6) さいきん、バヴィルについての新しい研究が出版されたが、未見である。Robert POUJOL, *Basville, roi solitaire du Languedoc*, Montpellier, 1992.

カミザール戦争

1702年7月23日の夕刻、セヴェンヌのサン・ジュリアン・ダルパーンで開かれた秘密の礼拝の集会に出席していた男たちのうち、数人が集まって話しあっていたとき、そのなかの一人が、現在投獄されている8人のプロテスタントの囚人を解放すべしという神の声を聞いたと告白した。この問題の8人の囚人は、バヴィルの下で働いているカトリック僧であるシェラの監視下に置かれていた。翌日になって、この神の声に従おうとするプロテスタントたち約50人は、20丁の小銃のほかに、ピストルやサーベルや槍をもって集まり、賛美歌を歌いながら、牢獄のあるボン・ド・モンペールに行進し、攻撃をしかけた。撃ち合いが始まり、危険を感じた守備兵たちが逃亡したため、負傷したシェラは、他の3人とともにプロテスタントによって殺害された⁷⁾。

プロテスタントからのこのような積極的な攻撃はきわめて例外的なことであった。しかも、カトリックの僧侶を殺害するというような行動は重大な帰結をひき起こさざるをえなかった。バヴィルは当然のことに軍隊の出動を命じる。プロテスタントの武装集団がこれに応戦する。真の内戦が始まり、山がちな土地の地理に通じているプロテスタントたちは、外部からやってきた国王軍を長期にわたって悩ますことになる。これは、いわゆる、のちにゲリラ戦と呼ばれるようになる形態の戦争であった。

この反乱軍はカミザールと称されていたが、一般に、勇敢であり、賛美歌を歌いつつ戦い、良き指導者に恵まれ、統制の点でも優れていた。けっして野盗的行動には走らなかった。自分たちを支えているものがなにであるかをよく知っていたのである。パリからやってくる国王の軍隊は、当時の地方の民衆にとっては、なによりもまず、外部からの侵入者にほかならなかった。カミザール軍は、捕らえた国王軍の兵士やカトリックの聖職者の取扱についても慎重な態

7) シェラについて、新しい研究が現れた。Robert POUJOL, *Bourreau ou Martyr? L'Abbé du Chaila (1648-1702). Du Siam aux Cévennes*, Presses du Languedoc, 1986.

度でのぞみ、処刑か釈放かを決定していた。かれらは、スローガンとしては、迫害の中止と「ナント勅令」の復活を掲げていた。武装人数は2,000人を越えなかったが、ゲリラ戦法によって、国王の正規軍と3か年のあいだ、渡り合うことができたのである。

初期の指導者が捕らえられたり戦死したりしたあと、ジャン・カヴァリエ⁸⁾とピエール・ラポルトの二人は、25歳足らずの年齢で、老練な指導者の手腕を発揮した。戦争とは貴族の仕事であると考えられていた時代において、数百人の農民達の武装集団が、2万5千人の国王の正規の軍隊を相手に戦争をなすうるとは、当時だれも考えおよばないことであった。したがって、国王軍も長い間、貴族のだれかが秘密にカミザール軍を指揮しているに違いないと信じていた。国王軍の初期の指導者ブロイも、かれに代わったモントルヴァルも、カミザール軍にたいして決定的な勝利を収めることができなかった。古典的な戦争方法しか考えることのできないかれらは、いわば、見えない敵と戦っていると感じざるをえなかったのである。

こうして、1703年10月から12月にかけて、バヴィルの進言により焦土作戦が実行され、466の村々が破壊され、焼き払われた。住民たちは、あらかじめ、各自、運びうるだけのものをもって所定の場所に集合するよう命じられていたが、なかには、山中に逃亡するものもあった。

こうした強行策は、プロテスタントの服従を結果するどころか、逆に強い反発をまねき、カトリックの教会や聖職者にたいして激しい報復が企てられた。カトリックの司祭たちは、いつも身の危険を感じるほどであった。

ここにいたって、ついに、国王軍の指揮官には、フランス最高の将軍であるヴィラール元帥その人が任命された。この軍隊は、軍事的にはカヴァリエの軍隊を撃破することには成功しなかったが、プロテスタントの食料や装備の貯蔵

8) ジャン・カヴァリエ自身の回想録が出版されている。これはきわめて興味深いものであるが、著者の立場を考えれば、書かれている事実の信憑性については、もちろん、注意深くなければならぬ。最近の版は次のものである。Jean CAVALIER, *Mémoires sur la guerres des Camisards*, Paris, 1987.

所をついに捜しあてることができた。このゆえに、カヴァリエも戦争の将来に不安を感じ、ついに、1704年5月16日、ヴィラル元帥とカヴァリエの会見が実現するに至った。フランスの元帥とゲリラ——国王から見れば、暴徒——の首領との「和平会見」は前代未聞であったといわれている。

カヴァリエは和平提案を受け入れ、100人の部下を伴って、フランスを去り、スイスへ向かった。しかし、カミザール軍のうちのロランらはなおも抵抗を続け、かれ自身は8月14日に戦死する。そのご、1704年の末に、カミザールの残党たちの蜂起計画があったが、これは事前に発覚し、加担者たちは処刑された。1709年にも、同じような計画があったが、成功には至らなかった⁹⁾。

こうして、武装蜂起を通してのプロテスタンティズムの再建の試みは、決定的に終了する。

プロテスタントの武装抵抗が、プロテスタンティズムの再建にとって良い効果をもたらしたのか、それとも悪い影響を及ぼしたのかという問題については、おそらく一義的な回答を与えることはできないであろう。一方において、この武装抵抗はカトリック信仰者のうちに———ということは、フランスの一般大衆のうちに———プロテスタンティズムへの反感をかきたてたであろうことは容易に想像される。しかし、他方、この蜂起以降、この地方においては、もはやカトリックのミサへの出席が強制されなくなったことも事実であり¹⁰⁾、プロテスタントへの迫害一般が弱まったことも確かである。たとえ弾圧がおこなわれたとしても、プロテスタントが、追いつめられた鼠となって猫を噛むことのないように、つねに最後の逃げ道を残しておくような手段が講じられるようになった。

カミザール戦争の終結以降、政府当局の弾圧が緩和したのにたいして、他方、プロテスタントの側においても、平和的な手段による信仰の再建の道が、とる

9) カミザール戦争についての研究はきわめて多いが、つぎの大型の5巻本が他を圧している。
Henri BOSCH, *La guerre des Cévennes —1702-1710—*, 5 vol., Presses du Languedoc, 1985-1990.

10) 他の地方ではすでに強制されてはいなかった。

べき最後のそして最善の手段として、真剣に模索されるようになる。この方向における再建の運動はアントワヌ・クール¹¹⁾の指導のもとにおしすすめられる。

アントワヌ・クール

1715年のルイ14世の死後、フランスは摂政オルレアン公フィリップの統治下にあったが、摂政はプロテスタントにたいして——確固たる信念にもとづいて、というよりもむしろ宗教的無関心から——、一般に寛大な態度をとっていた。さらに、摂政の母は、監禁されているプロテスタントの女たちやガレー船徒刑囚の男たちの解放のために尽力し、一定の成果を上げていた¹²⁾。しかし、1723年の摂政の突然の死後、ただちにその反動として、反プロテスタントの勢力が政府を動かし、1724年の悪名高い「宗教にかんする宣言」が公布された。

全18条から成るこの「宣言」は、いわば、これまでの幾多の反プロテスタント立法の要約的再確認であり、第一条では、カトリック以外の礼拝をなした男性はガレー船徒刑、女性は頭を剃ったうえで投獄、財産は没収、武器を携帯しておれば死刑と規定し、第二条では、牧師は死刑、牧師を助けたり、あるいは密告しなかったものは、第一条と同じ刑に処すと定め、以下、子供の教育、死を迎えた病人の取扱い、職業制限、結婚の無効性、等々の再確認を行っていた。

18世紀において、プロテスタンティズムの再建が、迂余曲折をへながら、ともかくも成功に向かって進んでいくとはいえ、そして、世紀の半ばを過ぎれば、政府の目的も、異端の撲滅から公的秩序の維持へと変化し、したがって、公共の平和が破壊されないかぎり、プロテスタントの礼拝が事実上黙認されるようになっていくとはいえ、上記の法律は厳然として存在し続けたのであり、フランス革命にいたるまで有効であったということを忘れてはならない。こうした状況のもとでの信者たちの根気強い再建活動の中心に、アントワヌ・クール

11) 注3にあげた表のうちの、「ガレー船からの棄教なき釈放者」の数がこの時期に、圧倒的に多いことを見られたい。

が立っている。

1795年、バ・ヴィヴァレに生まれたアントワヌ・クールは、母から確固としたカルヴィニズムの教育を受け、幼いときから、母に連れられて、秘密のプロテスタントの集会に参加していた。その才能は幼いときから広く認められ、20歳に達するまえにすでに、信者をまえに説教を始めていた。すでに述べたように、当時、南部の各地に「予言者」が現れていたが、クールはかれらの行動に疑問をもち、結局、かれらとは絶縁し、いっそう合理的な形態の信仰を広め、その基礎のうえに教会を再建しようと決心するに至る。南フランスの山間部の各地を説教して歩くうち、1715年ごろ、ピエール・コルテーズ¹²⁾に会い、かれを第一の弟子として迎える。

クールの活動の詳細な叙述もここでは省略せざるをえないが、ともかくも、1715年8月21日、すなわち、ルイ14世の死去の約1か月まえに、ついに、プロテスタントの地方宗務会議（シノード）を再開するのに成功する。もちろん、これは非合法の集会である。とはいえ、ルイ14世の死去と地方宗務会議の再建とが同時であるということは、象徴的なことであろう¹³⁾。

これを契機として、各地で地方シノードが再建されていくが、正式の牧師としての資格を持っていないクールは、まず弟子のコルテーズをチューリッヒへ送り、そこで聖別を受けさせ、帰国したコルテーズからクール自身が聖別を受ける。もう1人の弟子のロジェを加えて、これら3人は最初の「荒野の牧師」と呼ばれるであろう。

1717年、同じ任務に携わっていたアルノーが当局に捕えられて投獄された。逮捕された牧師を待っているものはただ死刑台だけである。プロテスタントたちのあいだでは、ただちに、アルノーの奪還計画が問題となったが、クールは

12) コルテーズについては、Charles BOST, *La première vie de Pierre Corteiz Pasteur du désert*, Paris et Lausanne, 1935.

13) これらの荒野のシノードの議事録は、エドモン・ユグによって、3巻本にまとめられている。Edmond HUGUES, *Les Synodes du désert. Actes et Règlements des Synodes nationaux et provinciaux tenus au désert de France de l'an 1715 à l'an 1793*, 3 vol., Paris, 1887.

強くそれに反対した。「アルノーの死は無益ではない」とクールは説いた。これ以降、武力による行動計画にたいして、荒野の牧師たちは一貫して反対することになる。

1719年、プロテスタントたちが武装蜂起を計画しているという噂が流れ、宮廷はかれらに平穏を保つよう呼びかけた。クールはただちに国王への忠誠を誓った。また、反プロテスタントの立場からバナージュが一つの文書を発表したのにたいして、クールが冷静に回答したことに端を発して、バナージュとクールとのあいだに文通が始まった。これは、「荒野の牧師」あるいは「荒野の教会」がいわば一定の市民権を持ち始めたことを示しているといっていよいであろう。

しかし、プロテスタンティズムの再建の道は容易ではなかった。政府やカトリック教会からの弾圧が厳しかったというだけでなく、次節で述べるように、プロテスタントたち自身の内部にも、和解しがたいほどの見解の相違があり、さらに、クールの行動にたいしても多くの批判があった。

このようなさまざまな批判あるいは非難のなかで、アントワヌ・クールの仕事は続けられた。農民のなかに入り、森や羊小屋や洞窟のなかで、聖書を読み、説教し、聖歌を歌い、新生児に洗礼をほどこし、結婚を祝福し、病人を慰め、死にゆくものに平安を与え、あるいは、献金を求め、各地に宗務会議（シノード）を組織する仕事をクールは精力的に続行した。もちろん、王国政府とカトリック教会の厳しい探索の手は絶えずかれの周囲に見えていた。同僚たちの多くは捕らえられて処刑された。クールは幾度も奇跡的に追及者の手を逃れた。極度の危険が迫ったときには、スイスへ逃れていた。1722年には、このスイスの地で結婚した。

この間、クールは、プロテスタント教会の再建のために、数点の文書を執筆し公刊した。また、すでに述べたように、ローザンヌに、フランスのプロテスタントの牧師の養成のためのセミネールを設立した。

プロテスタントの他の指導者たちとの不和や対立をこえて、クールは、つい

に1726年に、ヴィヴァレにおいて、はじめて、全国宗務会議を開催することに成功する。3人の牧師、9人の牧師補、33人の長老が、この記念すべきシノードに出席した。

しかし、当局の追及はますます厳しくなり、かれの首にかけられた懸賞金も、1万フランに達した¹⁴⁾。しかも、徐々に、かれの顔も人々に知られるようになったので、かれは、1729年以降、ローザンヌに身を落ち着けて、1760年のその死までの30年間で、この地の神学校で若い牧師の養成に尽力した¹⁵⁾。

こうして、アントワンヌ・クールは、18世紀のフランスのプロテスタンティズムの再建の最初の立役者として正当に承認されている¹⁶⁾。

プロテスタントの内部の対立

ところが、こうしたプロテスタントの再建活動にかんして、プロテスタント自身の内部に、さまざまな見解の対立があった。

まず、国内に潜伏して、生命の危険をおかして活動しているクールのような牧師と、外国に亡命している牧師との対立がある。

たとえば、ロンドンに在住していたクラリスは、牧師たちはフランスから立ち去るべきであると論じていた。オランダからも同様の声が聞こえていた。プロテスタントたちは墮落したバビロンを去るべきである¹⁷⁾、とかれらは強力に主張し続けていた。国内に留まっている牧師たちは、当然のことに、その見解に激しく反発せざるをえなかった。

14) 当時の日雇労働者の年収は約100フランであった。

15) ちなみにいえば、このような著名な人物であるにもかかわらず、クールの肖像画は一枚も描かれていない。すくなくとも、一枚も現存していない。かれの容貌が人に知られることを避けるためであろうと想像される。

16) クールの研究については、つぎの古典的大著がある。Edmond HUGUES, *Histoire de la restauration du protestantisme en France au XVIII^e siècle* —Antoine Court—, 2 vol., Paris, 1875.

17) 当時はまだ、「祖国」の観念が、のちに理解されるような内容をもっていなかったことに注意しなければならない。自分の住む土地がサタンの支配する土地になれば、サタンを追い出してもよいし、それができなければ、自分がその呪われた土地を去ってもよかったのである。

たしかに、国内に留まった人々からみれば、亡命したプロテスタントたちは、なにかプロテスタントとしての——あるいは、キリスト者そのものとしての——資格に欠けている人間のように見える。なぜなら、かれらは、国王やカトリック聖職者たちからの迫害を正面からその身に引き受けることを避けて、自分の土地を逃れ、外国において、その地の同胞たちの暖かい歓待のなかで悠然と生活し、その責務を忘れて眠りこけているからである。そのうえ、外国で生活しているゆえに、自国に残るものたちの苦難をなんら理解することができずにいるにもかかわらず、フランスに留まっているプロテスタントの行動にかんして、さまざまな批判や非難をなすからである。それに、かれらは、なによりもまず、外国に亡命しうだけの社会的な地位あるいは財力を持った人々であったことをも想起しておくべきであろう。国内に留まったものの多くは、そうした力を持たない階層の人間であった。

他方、亡命したものたちにとって、国内に留まっているプロテスタントたちは、ときには腹立たしい存在であった。亡命者たち自身は、たしかに、直接的な迫害を逃れたという点において、現に迫害を受けているものたちにたいして、一種の負い目があった。とはいえ、かれらの目から見れば、国内のプロテスタントたちは、外国での亡命者の生活がいかに不安定なものであり、いかに困難であるかを理解しようとしないうように見える。生まれた土地を去るということは辛いことであり、外国に住むということは容易なことではない。自分たちは、フランスに帰りたいと切望している。にもかかわらず、国内のプロテスタントたちは、反乱的な態度をとり続け、種々の事件をひき起こすことによって、政府の警戒心をかきたて、こうして、亡命プロテスタントたちが帰国する道をますます閉ざしている。

それだけではない。国内には、もはや正式の資格を持つプロテスタントの牧師はほとんど残っておらず、したがって、なんの資格も基礎的教養さえ持たない俗人たちが国内のプロテスタント信者を指導しようとしている。これでは、プロテスタント信仰の水準が低下するばかりであり、誤った信仰の道に陥る危

険さえも迫っている。外国の亡命者たちはこのように考えるに至っていた。このさいごの点は、亡命した牧師たちにとっては、自分たちが掌握しているはずの主導権が、国内の無知で粗野な俗人たちに奪われるということでもあった。じっさい、亡命中の牧師のなかには、クルールがローザンヌに創設したセミネールの卒業生が正式の牧師の資格をもっていることを承認しようとしないうるものもいるほどであった。

こうした国内のプロテスタントと国外のプロテスタントとの対立において、どちらが正当であったかを論議してみても、あまり益のないことであろう。ただ、国内に留まった牧師のほうが、殉教の精神に忠実であることによって、いっそう崇高なキリスト者であるという言明に反論することは困難であろう。そして、かれらこそが、フランス国内におけるプロテスタンティズムの灯が完全に消失することを阻止するのに大きい役割を果たしたのである。

しかし、他方、外国、ことにオランダに身を落ち着けたプロテスタントたちは、活発な文筆活動によって、フランスの同信者たちの悲惨な現状を世界に知らしめることを通して、フランスの政府に一定の圧力をかけ、国内のプロテスタントの境遇の改善に貢献すると同時に、また、かれらに直接的に語りかけることによって、かれらを激励することができたのである。というのも、国内のプロテスタントたちがその見解を文書に印刷して表現することは極度に困難であったからである。オランダからフランスに密かに運び込まれるプロテスタント文書はフランスのプロテスタントにとって貴重なものであった。オランダに在住の作家たちについては、ここでは詳論しえないゆえに、初期の作家としてジュリユーとペールの名前のみを挙げておこう¹⁸⁾。

さらにまた、財政面においても、外国に居住するプロテスタントたちがフランス人も外国人もふくめて、国内のプロテスタントのための募金活動を積極的

18) ちなみにいえば、オランダから寄せられるこれらの反カトリック文書の底に流れる根本思想こそ、のちにフランスで花開くいわゆる啓蒙思想を準備したのである。この点については、興味深い論文を見られたい。Georges GUSDORE, *L'Europe protestante au siècle des Lumières, Dix-huitième Siècle*, 1985.

におこない、少くない金額を送り続けていたことも、けっして忘れてはならないだろう。

国内のプロテスタントと国外のプロテスタントとのあいだには、こうした根源的な協力関係が存在したとはいえ、しばしば上述のような、さまざまな、かなり深刻な対立が表面化していたことを無視するべきではあるまい。

荒野の牧師にたいするもう一つの批判は、国内から起こっていた¹⁹⁾。それは、都市のプロテスタントによる農民のプロテスタントへの非難といいかえてもよい。都市の教養ある富裕なプロテスタントたちは、正式の資格のある牧師をひそかに家庭に招き、家族内だけの礼拝を行うことができたし、また、それに満足していた。礼拝がこの形態をとるかぎり、政府当局も徐々に見て見ぬふりをするようになっていた。というのも、まず、プロテスタントの活動が家庭内礼拝にとどまり、外部に表現されないかぎり、社会的な影響が少なかったからであり、また、牧師を家庭に招きうるような富裕な身分の人間にたいしては、警察も一定の遠慮をしていたからである。

このような社会の上位の階層に属するプロテスタントにとって、荒野の教会はあまりにも粗野なものに見えた。教養のあまりない指導者たちが、無知な農民たちを集めて、森のなかや岩かげで説教し、ともに聖歌を合唱するという信仰形態は、都市の教養あるプロテスタントにとっては、むしろ軽蔑すべきものであった。信仰はそのような外的形態を取らねばならぬものではないように、かれらには思われた。知識階層においては、宗教信仰の内面化はそこまで進んできていたのである。しかも、そのような農民たちの行動様式は、ともすれば

19) 以下の諸問題については、つぎの諸論文などが参考となる。Louis MAZOYER, *Essai critique sur l'histoire du Protestantisme à la fin du XVIII^e siècle*, B.S.H.P.F., 1930. Emile-G. LÉONARD, *Economie et religion. Les Protestants français au XVIII^e siècle*, *Annales d'Histoire sociale*, t. II, 1940. Daniel LIGOU, *L'Eglise réformée du désert. Fait économique et social*, *Revue d'Histoire économique et sociale*, 1954. Daniel LIGOU et J. GARRISON-ESTÈBE, *La Bourgeoisie réformée montalbanaise à la fin de l'Ancien Régime*, *Revue d'Histoire économique et sociale*, 1955. Yves KRUMENACKER, *Attitudes protestantes en Bas-Angoumois dans la deuxième moitié du XVIII^e siècle : société, démographie, religion*, B.S.H.P.F., 1983. Laura Maslow ARMAND, *La Bourgeoisie protestante, la révolution et le mouvement de déchristianisation à la Rochelle*, *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, 1984.

反乱的気分を醸成しがちであり、したがって、当局の警戒心を強めがちであった。要するに、都市の上層階級のプロテスタントにとっては、荒野の集会はむしろ有害なものに見えたのである。

さらにいえば、都市の上層のプロテスタントたちの信仰心そのものの希薄化を指摘するほうが重要であるかもしれない。かれらの多くは、近代的個人意識の確立に伴ってその信仰心を内面化したというよりも、むしろ、いわゆる啓蒙思想の人間主義を無反省に受け入れることによって、宗教信仰そのものを脆弱化していたのである。迫害が弱まり、プロテスタントの経済活動が活発化するにつれて、ブルジョワの信仰心は必然的に世俗化せざるをえなかった。信仰は、一つの習慣、一つのエートスと化していかざるをえない。それは、もはや、生命を賭して保持すべき信念ではなかった。じっさい、上層のプロテスタントのなかには、自分の市民的権利を確保するために、外部から強制されることなしに、カトリックによる洗礼や結婚を躊躇めらわなかった人々もいたのである。もちろん、カトリックの司祭の側も、かれらがプロテスタントであることを百も承知でこれらの秘蹟をとり行っていたのである。

他方、荒野の集會に参加する農民たちにとっては、当然のことに、都市の豊かなプロテスタントたちは墮落した信者として映じざるをえなかった。かれらにとって、信仰とは、内的であるばかりでなく、また外的にも表出されるべきものであった。同じ信仰のものたちが相い集まり、説教を聞き、聖書を読み、ともに聖歌を歌うところにこそ、真の信仰生活が存在したのである。この信仰共同体を離れては、信仰はもはや消滅を運命づけられていた。かれらにとって、家庭内礼拝で満足するものたちは、信仰の薄い人間、あるいは信仰を失いかけた人間であると考えられた。まして、カトリックにたいしてますます妥協的態度を強めている都市のブルジョワのプロテスタントたちは、いかがわしい存在以外のなにものでもなかった。

じっさい、都市のブルジョワのプロテスタントたちは、すでに自分たちの息子をけっして牧師にしようとは考えなくなっていた。それはあまりにも危険な

職業だったからであり、そこから獲得できるものはなにもなかったからである。そこでは、宗教信仰にとって不可欠の随伴物であるべきはずの献身の精神、あるいは殉教の精神はすでに消失していた。

ところが、すでに述べたように、農村のほうでは、牧師が決定的に不足していたのである。牧師の不足が、プロテスタンティズムの再建にとっての最大の障害であるとさえ考えられていた。じじつ、牧師の多くはすでに下層民の出身者であり、そのゆえに、理想的な牧師と呼ばれるにはほど遠い人間も混じっていた。もし、ブルジョワの教養ある子弟が牧師を志願すれば、その資格を獲得するのはきわめて容易であったろう。信仰は厚かったとしても、基礎的教養に欠けている農民の息子をともかくも一人前の牧師に仕上げるのは容易なことではなかった。あるいは不可能でさえあった。この点においても、農村のプロテスタントたちが、都市の富裕なプロテスタントたちにたいして抱いた反感の理由の一つが見いだされる。

ところが、さらに、プロテスタントの地方宗務会議および全国宗務会議が、もはや軍隊の急襲を受けることのない安全な会議となるやいなや、上層のプロテスタントたちはふたたびそこに出席するようになる。かれらの主要な目的は、プロテスタント社会のなかでしばらく失われていた主導権を自分たちの手中に取り戻すことであった。このようなブルジョワのプロテスタントにたいして、下層の農民のプロテスタントたちが反感と軽蔑の念を抱いたとしても至極当然であろう。上層のプロテスタントにとっても、もっとも大切なことはすでに宗教信仰ではなかったのだといってもよかろう。このようにして、プロテスタンティズムは、その指導者となるべき人々の手中において、ますますその宗教性を喪失していったのである。

もっとも、18世紀そのものが、一般的に、信仰の衰退の時代であったとするならば、信仰の希薄化を上層階級だけにおいて指摘することは正確さを欠くことになるだろう。すでに、1768年、南フランスのマリーという一人の女は、荒野の教会において結婚しながら、別の男に惹かれたために、棄教して、カトリ

ックに改宗し、裁判所に訴えて最初の結婚の無効を宣言してもらい、そして、新しい男と結婚するという望みを易々と果たしたのである。

じっさい、プロテスタントへの迫害がほとんどなくなり、そして、プロテスタンティズムがその宗教性を徐々に喪失してゆき、たんなるひとつのモラルとしての性格を帯びるにすぎなくなるにつれて²⁰⁾、プロテスタントのなかには、絶望のあまり、カトリックへ改宗するものさえ現れるほどであった。

また、ブルジョワ階層と農民階層とのあいだには、プロテスタンティズムの再建方法として、戦闘的手段をとるか平和的手段をとるかという点にかんしては、むしろ、もはや問題はなかったが、政府にたいしてまず第一になにを要求するかについては、決定的な対立があった。ブルジョワ階級に属するプロテスタントにとって、とりわけ大切なのは、確立されていない戸籍 (*état civil*) を再建し、その財産の譲渡や相続における障害を除去することであり、また、宗教による職業制限を撤廃することであった²¹⁾。換言すれば、一社会内において、十全な意味の一市民となることであり、一国家内において、十全な意味の一公民となることであった。この要求のうちには、もはや宗教的要素はきわめて希薄、あるいは不在といってもよいであろう。

これにたいして、下層階級に属するプロテスタントは、そうした市民的政治的要求よりもむしろ、純粋な宗教的要求を強く抱き、公的礼拝の復活と教会の再建をなによりも切望していた。かれらにとっては、ブルジョワたちの要求が実現したとしても、たいした利益をもたらすようには見えなかった。職業制限などにほとんど利害関心のない旧貴族たちの一部も農民の側に立っていた。この対立は、やがて、1787年の「寛容令」の公布とそれへの反応においても顕著に示されることを、われわれはみるであろう。

20) この問題は、当然ながら、のちに詳しい論考の対象となるべき主題である。

21) もっとも、南フランスにおいては、プロテスタントの住民が多数派をなしているうえに、「ナント勅令廃止勅令」自身が「プロテスタントは存在しない」という大前提のうえに立っていたので、プロテスタントが公然と市政職などに就いているという逆説的状况が生まれていた。

政府の態度の変化

1702年から1709年に至るカミザール戦争のあと、プロテスタントにたいする政府の態度が軟化し始めたことについては、すでに言及したが、もちろん、この軟化は一直線に進んでいったわけではなく、諸々の事情に支配されて、弾圧の強化と弛緩とが断続的に継起していた。しかし、18世紀の中葉を境として、政府の態度は決定的に軟化し始める。もちろん、これは、プロテスタントにたいする一般世論の大きい変化に対応している。その変化とは、一言でいえば、プロテスタント問題にたいする一般大衆の無関心である。

プロテスタントの牧師であるがゆえに、ロジエットは1662年に処刑されたが、牧師の処刑はこれが最後であった。あのカラス事件は1762年に起こったが、この事件は、むしろ、一般的な寛容の雰囲気の中で、カトリックの非寛容あるいは狂言が、例外的に強く表現された場合であるとさえいわれている。そして、じっさい、3年のちの1765年にはカラスの名誉は回復されていた。プロテスタントがガレー船徒刑の宣告を受けるのも1762年が最後である。それ以前の1759年には、プロテスタントの士官に与えるべき特別の勲章が制定されていた。というのも、それまでの勲章はすべて、たとえば、サン・ミッシェル勲章のように、カトリック信仰と関係するものであったからである。この事実、軍隊内においても、プロテスタントたちが公然と活躍していたことを物語っている。いうまでもなく、カラスのために精力的に論陣を張ったヴォルテールの『寛容論』が出版され、世論に大きい影響を及ぼすのは、1763年のことである。1766年以降になると、パルルマンもプロテスタントの結婚の有効性を承認しないことが公序良俗に反する有害な帰結を生むことを認めざるをえなくなる。カラスに有罪判決を下したのは、トゥールーズのパルルマンの刑事部であったが、その同じパルルマンの民事部はプロテスタントの結婚の有効性を承認せざるをえなかった。プロテスタントの入獄者（女性）がコンスタンス監獄からすべて解放されるのは1768年であり、ガレー船徒刑囚（男性）がすべて解放されるのは、

ルイ16世の時代になってからの1775年である。そして、政府の関心自体も、寛容の精神や良心の自由などへの配慮にたいしてよりも、財産制度や社会秩序などの社会的政治的経済的配慮にたいしていっそう重点を置くようになっていった。

では、政府の側の態度はなぜ迫害から寛容へと変化したのであろうか。もちろん、いわゆる啓蒙思潮の進展があり、国内における宗教的統一の重要性の意義が以前ほど重視されなくなり、それに代わって、国内の平和維持のほうに重大だと考えられるようになったからであるが、他方では、いかなる暴力的手段を用いたとしても異端を撲滅しえないとすれば、この一派を地下に追いつめて、その勢力の暴発の危険に絶えず怯えるよりも、むしろ、かれらの存在を公的に認知したほうが、かれらの動向を監督し統御しやすいことは明らかであるからである。荒野の集会よりも市中の礼拝のほうが、また、「予言者」たちの隠された奇怪な行動よりも、牧師の公的活動のほうが、政府にとって安心できるものであったことはいうまでもない。

それに、すでに、プロテスタントが武力を用いて政府に反抗し、公共の平和を乱すかも知れないという懸念は完全に消失していた。プロテスタントの指導者たちは、機会あるごとに、国王への忠誠を表明し、プロテスタントの民衆に向かつては、平和と服従を呼びかけていた。そして、先走っていってしまえば、カトリックにおけると同様に、プロテスタントにおいても、日常生活における宗教の地位は一般的に低下していたのである。

こうした事態のなかで、18世紀フランスのプロテスタンティズムの最後の指導者として、ラボー・サン・テチエンヌが登場する。

ラボー・サン・テチエンヌの時代へ

アントワヌ・クールが、ローザンヌにおいて、プロテスタントの指導者の養成に専念し始めてから20年後の1750年1月、一人の牧師の7歳の子供が送られてきた。かれの名はジャン・ポール・ラボーであり、その2年後にはその二人の弟も兄に合流した。かれらの父はポール・ラボーであり、ニームではもっ

とも著名な牧師であり、アントワヌ・クールとも密接な交流があった²²⁾。ポール・ラボーは、奇妙なことに、その地の地方監察官であるルナンとも交友があり、さらに奇妙なことは、ニームの司教であるベクトリエーヴルにも厚く尊敬されていた。南部フランスでは、カトリックとプロテスタントとの融和は、ある側面においては、この程度にまで達していたのである。ポール・ラボーの妻も名家の出身であり、そのゆえに、その夫がプロテスタントとして危険な状況に陥ったとき、幾度もかれを救ったことがあった。ポール・ラボーの家は牧師たちの避難所になっていたとさえいわれている。この事実は、プロテスタントの上層階級がカトリックの上層階級との同質性を示し始めたことを表しているといってもよいだろう。それは同時に、カトリック信仰とは異なるものとしてのプロテスタント信仰をどこまでも堅持しようとする下層階級と、他方、いわゆる啓蒙思潮に身を任せて、プロテスタント信仰を一つのモラルに解消することによって、プロテスタント信仰の異質性を極小化してしまった指導階級とのあいだの距離が小さくはないことをも示している。

ポール・ラボーの3人の息子たちは、ラボーという名前のゆえに襲ってくるであろう危険を回避するために、まもなく、それぞれ、サン・テチエンス、ボミエ、デュビュイと名乗ることになる。これらの名前は、すべてフランスの歴史のなかに記されているが、とりわけ、長男のラボー・サン・テチエンスは、プロテスタントの政治家として、フランス革命期を通して、もっとも著名な活躍をなすであろう。かれこそ、アントワヌ・クールのあとをついで、フランスのプロテスタントの市民的権利の回復にもっとも貢献した人物である²³⁾。

22) ポール・ラボーがアントワヌ・クールに宛てた多くの手紙は、つぎの2巻にまとめられている。A. PICHÉRAL-DARDIER (éd.), *Paul Rabaut, Ses lettres à Antoine Court (1739-1755)*, 2 vol., Paris, s. d. (1884). ラボーの伝記としては、Camille RABAUD, *Paul Rabaut*, Paris, 1921. ラボー一家を扱ったものとしては、*Les Rabaut, du désert à la Révolution* (Colloque de Nîmes), Presses du Languedoc, 1988.

23) ラボー・サン・テチエンスの伝記としては、Robert MIRABAUD, *Rabaut-Saint-Etienne*, Paris, 1930. があり、新しいものでは、André DUPONT, *Rabaut Saint-Etienne*, Strasbourg, 1946. Nouv. éd., Genève, 1988. があるが、これらは、いまだ「頌辞」であって、「研究」ではない。

ラボー・サン・テチエヌは、1750年以降継続してローザンヌに滞在し続けたわけではなかったが、1764年、その地のアカデミーでの試験に合格し、牧師の資格を取得した。これ以降、かれは牧師としての活動を始めるが、かれがいかに活躍したか、またその活動を支える思想の総体はいかなるものであったかを論じることは、ここでは適切ではあるまい。その作業のためには、独立した別の論考が必要であり、1787年のいわゆる「寛容令」の公布やフランス革命との関連において論じるべきである。ただここでは、次の諸点のみを記しておこう。すなわち、かれは、宗教的寛容あるいは宗教的自由のための多くの文書を書いたこと、当時華々しい展開を見せていたいわゆる啓蒙思想を受け入れるに至ったこと、ラファイエットやマルゼルブなどの、プロテスタントに好意を持つ有力者たちと密接な接触を持つようになったこと、1785年12月にはついにパリにおもむき、いわばプロテスタントたちの代表者として、あの、いわゆる「寛容令」の公布に尽力したこと、国民議会で華々しく活躍したこと、その活躍により、1790年には議長に選出されていること、国王の裁判においては、その処刑に反対したこと、そして、1793年12月5日、ジロンド派として処刑されていること、などである。

われわれは、以上をもって、18世紀のフランスにおけるプロテスタンティズムの概略の素描を一応終えることにする。したがって、われわれの仕事の準備作業は、本稿を含めて、7回にわたって、断片的に発表してきた史的略述をもって、一応完了したとせざるをえない²⁴⁾。つぎになすべきことは、フランス革命の直前の1787年に公布されたいわゆる「寛容令」が、いかにして公布され、いかに受容されたか、そしてこの勅令の意義はなんであったかを解明することである。

24) われわれは、プロテスタントの亡命者の活動にはほとんど言及しなかった。この問題も無視すべきではなく、したがって、いつか、機会をとらえて、取り上げたいと考える。